

hidarimakiの  
この逸編

# 道

原題：LA STRADA



監督：フェデリコ・フェリーニ  
プロデューサー：ディノ・デ・ラウレンティス  
カルロ・ポンティー  
音楽：ニーノ・ロータ  
キャスト：ジュリエッタ・マシーナ  
アンソニー・クイン  
製作：1954年イタリア作品  
モノクロ 104min  
日本上映：1957年  
DVD発売元：朝アイ・ヴィーシー

「ジェルソミーナ」が、スリーサンズの演奏でラジオから流れていた。切なく哀しい旋律は多くの人々に支持され、繰り返し電波に乗って聞かされた。僕はこの頃、フェリーニも「道」という映画も知らず、けれど「ジェルソミーナ」という調べだけは頭の片隅に響かせていた。その作曲家がニーノ・ロータという名前であることも知った。後に「若者のすべて」（監督：ルキノ・ビスコンティ）、「太陽がいっぱい」（ルネ・クレマン）近年では「ゴッド・ファーザー」（フランシス・コッポラ）などのメインテーマを作曲した音楽家だが、僕はこの作曲家に興味を覚えていた。高校生になった頃、「太陽がいっぱい」のサウンドトラックがリクエスト番組でオンエアされ、それがロータの曲だとわかり、学校を休んでミナミの東宝敷島（閉館）へロードショーを楽しんだ。だから、映画をキャストや監督としてではなく、サウンドを入口にして映画館に足を運んでいたのだ。つまり、僕の映画への登竜門は、ラジオを媒介にした映画音楽だった。とくに洋画を見る動機は、ラジオの音楽番組から大きな影響を受けたといえる。見も知らぬ

異国の音楽が映画へのノスタルジーをかきたててくれたのだった。

スクリーンで「ジェルソミーナ」を聴きたくて、「道」のリバイバル上映を機に見に行ったのは、ロードショーから遙か数十年も経っていた。粗暴なザンバノと従順だが少し頭の弱いジェルソミーナの物語は、男の一方的でわがまま、そして暴力のために女が少しずつ壊れていくようになっていく。今で言えばDVなのだが、大道芸人ザンバノがジェルソミーナを冷酷に捨てたあと、傷心の彼女は死んでしまう。数年後、ジェルソミーナの死を聞かされたザンバノが嗚咽する場面でラストを迎える。

主人公ジェルソミーナを演じるジュリエッタの白痴女の演技が素晴らしく、随所に見られるパントマイムな表現には目を見張ってしまう。ジェルソミーナを愛し、彼女を認めていた綱渡り芸人の男もザンバノに殺され、雪景色の田舎道を、ザンバノが運転する車が破局に向かって走っていくシーンが白眉である。背景にはロータのメインテーマ「ジェルソミーナ」が流れるのだが、美しく、しかし哀しくて絶望的であった。

ザンバノとジェルソミーナが初めて出会う場所が海岸線の続く昼の浜辺であったが、最後、彼女の死にザンバノが号泣するシーンもやはり夜の浜辺であることが印象的であった。またサブテーマとなるリリカルな間奏曲が挿入され、重要なシーンでアクセントとなっている。これもロータの魅力を満喫できる曲であった。

この作品は2人のプロデューサーによって製作された。一人は「カピリアの夜」「鉄道員」などをプロデュースしたディノ・デ・ラウレンティス。もう一人は「ひまわり」「砂丘」などのプロデューサー、カルロ・ポンティー。この映画は製作者・音楽家・キャストと、今となっては最高の映画人を揃えた作品で、フェリーニが監督として幸運な創作環境の中で育んだ渾身の逸編だと思う。

hidarimaki





独立行政法人雇用能力開発機構が、全国 83ヶ所に設置している地域職業訓練センターの内の一つ、通称A' ワーク創造館は、昨年から大阪府の公募を経て、有限責任事業組合大阪職業教育協働機構が運営していることは、『なび』でも報じてきた。館長は、わが友高見一夫君が務め、ボクも経営陣の一員だから、出資金も献じ、補助金ゼロであるから運転資金の借り入れもした。前期、利用者数、収支面ともに苦戦したが、高見君達の活躍や目には見張るものがあり、後期になって利用者数は急増し、収支も黒字ベースに転じた。

ところが、昨年末、厚生労働省と雇用能力開発機構が、突如、83ヶ所の施設を平成 23 年度末をもって廃止すると通告してきた。元々、雇用能力開発機構は、その放漫経営がマスコミでも叩かれ、新組織「高齢・障害・求職者支援機構(仮称)」に再編統合されることが決まっており、平成 21 年 3 月の通達によって、地域職業訓練センターには、その年の 12 月時点の利用実績によって、新組織への移行の可否を決すると通告されていた。それもあって、A' ワーク創造館の旧運営法人は撤退、解散し、府は民間に公募したのであった。それに合格したのが我々だ。そして、見事に、利用者数は基準値をクリアし、府や土地の持ち主である大阪市ともども、胸をなでおろしたのであった。

それがである…基準値達成如何を問わず、あんたらは新組織には連れて行かない、見殺

しだというのである。しかも、委託契約は平成 24 年 3 月までの 3 年となっているのに、途中で契約を破棄するというから、開いた口がしばらく塞がらなかった。さらには、自治体には何の相談もない通告

で、希望するなら自治体に転売するとうに及んでは、さすがに府の関係者も怒り心頭で、異例の抗議を行い、岩手や青森など各地からも存続要望が相次いだ。

ボクは、この数年、いろいろあって、行政というのはあてにならないものだど肝に銘じてきたが、契約不履行までするとは想像していなかったし、霞ヶ関と闘うという民主党政権も信用することにしてきた。ひとつも闘っていないではないか！放漫経営を追求されるや、自分達に都合の良い大規模事業や、人件費は僅かな縮小に止め、地方の現場の事業は成績如何を問わず廃止とは…。

あまつさえ、今年度の予算で雇用能力開発機構は、A' ワーク創造館のエアコンの修理を約束し、見積まで取ったのに、急速、予算は凍結と通告してきた。霞ヶ関なら何でもありか！それでも、ボク達には運営責任がある。冷房もなしに、必死に仕事を探し、訓練を受ける受講生を迎えられるか！自前でエアコンは修理する。『なび』でこんなに！！と乱発するのは初めてかな？いい湯加減じゃなくなってしまった。でも、エアコンの工事費どうしよう…トホホ。

関ナイス代表取締役 富田一幸



霞ヶ関 VS ボクらのエアコン戦争

